

<論文>

## 「モード間翻訳」による非言語機能の変更について

—3段階分析の枠組みを用いて—

Functional changes of images by “intermodal translation”.

Three-step analysis framework for interaction.

藤濤 文子

(神戸大学)

### Abstract

As Calzada Pérez (2005) says, "cross-cultural communication cannot be understood without taking into account phenomena such as multi-modality and...images need translating as much as words". The present paper focuses on multi-modality and illustrates the interaction between images and words in translation. The following is a proposed framework for a model of a three-step analysis of the interaction between images and words in translation. The first step is the analysis of "inter-image translation", i.e. to check whether images of a source text are modified or not. The second step is the analysis of "intermodal translation" which describes whether nonverbal information is verbalized and vice versa; the third step examines whether functions of images are changed or not. By using this framework concrete examples of three Japanese picture books are compared with English and German versions, to find out how the functions of the same images can be changed by intermodal explicitation.

### 1. はじめに

絵や音楽は国際語、とは人口に膾炙した表現だ。言葉は通じないと理解できないが、絵や音楽ならそのままでもそれなりに受容することができる。言葉によらないこうした非言語要素が言語要素と共に含まれる作品を翻訳する場合、非言語要素はどう扱われるであろうか。例えば映画やマンガなどのジャンルの翻訳では、映像や音響などの非言語要素を参考にはするものの、翻訳行為の対象は言語部分のみであり、非言語を編集する決定権は翻訳者に与えられないのが通例であろう。では、非言語要素はそのまま残されて、そのまま理解されるのだろうか。

言語要素と非言語要素を含むテキストは、両者が相補的に作用しあう総合的なテキストである。であるならば、言語要素の訳出に伴い、非言語要素の解釈や働きに何らかの変化が生じる可能性があるだろう。本稿では、まず言語要素と非言語要素のインタラクションに注目して、言語要素との関係で非言語要素の働きが変化することを示し、非言語に着目することの重要性を主張する。そして、翻訳における非言語的側面の分析の枠組みを提案すると共に、その中でもまずは基本モ

デルを提示するために、非言語要素のうち視覚要素で静的な画像を対象とする。つまり絵本、漫画、挿絵・写真入りの印刷物などであるが、具体例分析にはそのうち日独英の絵本翻訳における絵の役割を中心に扱う。これまで、言語的側面に焦点を当てた分析が主流であったため、本研究ではあえて非言語的側面から翻訳を見る。

## 2. 先行研究における非言語要素への注目

翻訳研究においては、非言語要素が研究対象として取り上げられることはまれであった。Jakobson (1959) は、記号間翻訳という概念を出して、言語記号と言語以外の記号の間の翻訳に初めて注目したが、そこでは「言葉の芸術から音楽、舞踏、映画、絵画」への転移が名指されているだけで、それ以上の言及はない。テキスト内に言語と非言語の両方の要素を含む総合テキストに初めて注目したのは、テキストタイプ別翻訳理論を提唱した Reiß (1971: 49-52) であると言われる<sup>1</sup>。彼女は、第4のテキストタイプとして言語外の媒体が重要な役割を演じる歌や演劇などを視野に入れた「聴覚メディア型テキストタイプ (audio-medialer Texttyp)」を挙げ、その後マンガも含む「マルチメディア型テキストタイプ (multimedialer Texttyp)」を提唱した。このタイプに入るジャンルは多様であり、非言語要素の関与の度合いも様々である。例えば、ラジオ劇での効果音、テレビドラマの映像、合唱曲の音楽的要素、演劇における衣装や舞台装置など、非言語要素にも様々な種類があり、それらの関与について翻訳者や翻訳批評家は考慮する必要があるという。

その後、翻訳研究において非言語要素を含むジャンルは徐々に関心を引く研究対象となり、例えば視聴覚翻訳の研究は 90 年代以降に急増し、絵本などの児童文学やマルチモード性の高い広告ジャンルも 2000 年以降盛んになる。また Cattrysse (2001: 1) はビデオゲーム翻訳の観点から、「マルチメディア翻訳」がマルチメディアメッセージの内の言語部分の翻訳だと理解されることが多いが、「マルチメディアコミュニケーション全体の中に言語部分の分析を統合する必要がある」と述べている。Calzada Pérez (2005) は、広告翻訳の立場から、翻訳研究は言語テキストに焦点を当ててきたが、「今日の異文化コミュニケーションは、マルチモード性 (multi-modality) とハイパーテキスト性 (hypertextuality) といった現象を考慮せずには理解できない」とし、「言語と同様に画像も翻訳される必要がある (images need translating)」と述べている。

機能主義的翻訳研究を代表する Reiß & Vermeer (1984/1991: 33f.) は「ある文化では言語で表現されること (例えば 'Thank you!') が、別の文化では非言語 (微笑み) で表現されることがある」とし、何を言語化するかは文化により異なるとする。したがって、起点テキスト (ST) の言語情報を翻訳して目標テキスト (TT) で非言語化したり、逆に ST の非言語情報を翻訳して言語化したりすることもありえる。翻訳における非言語要素の研究には、翻訳行為研究の射程内に言語と非言語の両者を入れる機能主義的翻訳研究の枠組みが適切だと思われる。この立場では、もともと翻訳を言語間のみ転移とは捉えず、コミュニケーション行為全体として捉えるものである。

## 3. 非言語要素分析の枠組み

非言語要素に着目した基本分析モデルとして、次の 3 段階を設定することができるだろう。まず

は非言語要素自体に物理的変更が加えられているかどうか、次に非言語・言語要素間の関係に変更が生じているかどうか、さらにそれにより非言語要素の機能に変更があるかどうか、という3つの段階である。

### 3.1 第一段階:「画像間翻訳」あるいは「非言語間翻訳」の分析

先ほど引用した Calzada Pérez (2005) の「画像を翻訳する」とは、画像そのものが翻訳過程で加工編集されることを意味している。総合テキストの翻訳において、ST と TT 間で転移が起こるのは言語間だけではなく、非言語要素間においても見られる現象である。そこで分析モデルの第一段階として、非言語要素に観察可能な何らかの変更が生じたかという観点を挙げる。これは画像Aから画像Bへの転移であり、「画像間翻訳」と名付けたい。または「言語間翻訳」の対概念として、広く「非言語間翻訳」とも呼べるだろう。具体的には、絵の一部が省略されたり、左右が逆転したり、サイズや色が変わえられたり、あるいは全面的に差し替えられたり、といった物理的に観察可能な変更があるかどうかを分析する段階である。全く変化のないものから全面差し替えまで、ST と TT の対応関係は 100% から 0% までありうるだろう。変更される理由としては、規制や価値観、読者層への配慮、美意識などの違いがあるだろう<sup>2</sup>。映像の特徴は、「全体性、同時性、即解性」(保崎 2002, 41)にあるという。こうした特徴のために、画像のもつ影響力は大きいと言えるが、この段階の分析では、一瞥して変化の有無が認識できるものとなる。

### 3.2 第二段階:「モード間翻訳」ないし「非言語・言語間翻訳」の分析

先ほどの「画像を翻訳する」とは違う意味で、絵本研究の O'Sullivan (2006) は「絵を翻訳する (translating pictures)」という似た表現を使っている。これは、翻訳者が ST の絵から情報を読み取って言語化することを指している。つまり画像 A から言語 B へのモード間の転移である。ただし画像は残るので、言語化された情報は追加された重複情報となり、モード間で冗長性が高まる。画像に物理的変更がなく一見すると同じように見えても、言語情報の追加変更に伴い画像のもつ情報価値に変化が生じることにつながる。画像と言語間のこうした情報の転移を「非言語・言語間翻訳」、あるいは「モード間翻訳」と呼びたい。これは言語と非言語の両者に関わるものであるが、観察可能な現象としては言語間翻訳における変更(追加)として表れるため、分析は言語間翻訳と似ている。しかし純粋な言語間翻訳ではなく、追加情報の起点は ST の非言語要素にある。なお、逆方向のモード間翻訳、つまり言語 A から画像 B への転移もあり得るため、言語情報は追加されるばかりではなく、省略される場合もあり得る。

### 3.3 第三段階:非言語機能の分析

清水 (1993, 2f.) によると、人間の感覚器官を通して入力する情報のうち、視覚からの入力情報 ( $10^6 \sim 10^8 \text{bps}$ ) は聴覚からの入力情報 ( $10^4 \sim 10^5 \text{bps}$ ) の 100~1000 倍あるが、人間が処理し、認識や記憶につながる情報 (100bps) は、ほんの一部であるという。つまり視覚情報のほとんどは役に立っておらず、画像の情報の一部のみが注目され認識されることになる。とすれば、同じ画像であっ

でも、その中の何をどう見るか、どの観点に着目し、どの方向で解釈して意味づけるかは、そこに添えられる言語情報による「意識化」に影響を受けることになるだろう。画像は言語ほど記号としての意味が明確ではないため、幅広い解釈の可能性をもっており、したがって言語とのインタラクションによって様々な機能を持ち得ると言えよう。

そこで非言語分析の第三段階として、機能的側面に変化が生じるかどうかを確認する段階を設定する。もちろん画像間翻訳とモード間翻訳と絡めた分析となる。画像が保持されたからと言って機能が不変であるとは限らず変更されることもあり得るだろう。

上記で提案した三段階の分析は、以下のように整理することができよう。

- (1) 画像間翻訳: (ST 画像→TT 画像) 画像の物理的保持／変更。
- (2) モード間翻訳: 言語と非言語の間の情報の転移。
  - (2-1) モード間明示化: (ST 画像→TT 画像+TL)
  - (2-2) モード間暗示化: (ST 画像+SL→TT 画像)
- (3) 非言語機能: (ST 画像機能→TT 画像機能) 非言語機能の保持／変更。

#### 4. モード間翻訳と非言語機能変化の具体例分析

では第3節で提案した非言語分析の基本モデルの枠組みを用いて、言語とのインタラクションにより非言語要素の働きが変化することを、3つの作品の具体例分析により示したい。第一段階の画像間翻訳には翻訳者が決定権を持たないことが多いため、翻訳行為が直接関わる第二と第三段階での変更を中心に扱うこととする。つまり、同じ画像でもモード間翻訳によって機能が変わる例を取り上げる。機能変化には様々な程度と種類があるため、変更の程度の比較的小さいものから大きいものへと順を追って例示したい。

##### 4.1. 記号間冗長性による情報価値の縮小と副次化

最初の例として、林明子著『こんとあき』と、その英語版 *Aki and the Fox* およびドイツ語版 *Aki und Kon, der Fuchs* を取り上げる。例文提示の際、英語版は TTE、ドイツ語版は TTD と表示する。この作品は絵と文の両方が林によるものであり、英語版には翻訳者情報がないため自己翻訳だと思われる。画像間翻訳に関しては、ドイツ語版では変更が全くないのに対し、英語版では裏表紙と中表紙の絵が全面的に差し替えられ、他にも若干のレイアウトの変更が見られる。ただし、本文中の画像には両版ともに変更が認められない。次にモード間翻訳については幾つか変更点が認められる。例を二つ挙げる。



図1 『こんとあき』(p.15)

絵の情報価値の縮小と副次化  
(例1の絵)

#### 例 1

ST:どうとう ドアがしまつて、きしゃが うごきだしてしまいました。ずっと まつても、こんは もどつてきませんでした。そこへ しゃしょうさんが、きっぷをしらべに やつてきました。しゃしょうさんは、あきのはなしをきいて いいました。「きつねくんなら、むこうの ドアのところで みかけましたよ。

TTE: Suddenly the train started with a jolt. “Kon!” called Aki. But there was no answer, and she began to cry. The conductor came by to find out what was wrong. “If it’s a fox you’re looking for,” he said, “I just saw one over by the door.”

TTD: Schon schlossen die Türen und der Zug fuhr an, doch Kon war noch immer nicht zurückgekehrt. Als der Schaffner kam, um die Fahrscheine zu kontrollieren, erzählte Aki ihm schluchzend was passiert war. Er beruhigte das Mädchen: „Wenn es weiter nichts ist, den Fuchs habe ich dort hinten an der Tür gesehen.“ (逆翻訳: もうドアが閉まって汽車が発車したのに、こんは帰つてこなかった。車掌が切符を調べに来たとき、あきは泣きながら事情を話した。彼は女の子をなだめた。「そういうことなら、そのキツネを向こうのドアのところでみかけたよ) )

ST では少女が泣いていることは絵から分かるが(図1参照)、言語上は述べられていない。言語情報のみでは「あきのはなしをきいて」というところから、きちんと状況説明ができてしっかり対応できているような印象さえ与えかねず、心細い様子は絵からしか得られない。絵が重要な情報を担っているということだ。つまり画像と言語が対等で補完的な情報価値をもっている。他方、英語版もドイツ語版も下線部にあるように、泣いている様子を絵から読み取って言語化しているため、情報が重複してしまった<sup>3</sup>。つまり、ストーリー展開に重要な情報が、絵からしか得られない情報ではなくなつてしまい、それと共に絵が挿絵化したと言えるだろう。では、絵からしか得られない情報はあるのだろうか。例えば車窓からの風景や弁当などが日本的場面の描写となつて作品の雰囲気を与えている。画像は、このようなストーリー展開に直接関わらない副次的な情報価値を帯びたと言え

るのではないだろうか。日本の読者にとってはありふれた道具だが、外国の読者にとっては、豊かな具象性を伝える背景として機能することになったのではないだろうか。



図2『こんとあき』(p.24)

絵の情報価値の縮小と言語の優位性(例2の絵)

## 例2

ST: ふたりは、すなのうえに あしあとを つけました。

「あれ？こん、この あしあとは だれの？」

TTE: The two friends were making footprints in the sand when Aki noticed that someone had been there before them.

“Whose tracks are these, Kon?” she asked.

TTD: „Schau Kon, meine Fußspuren sehen anders aus als deine. Aber zu wem gehört denn diese Spur?“, fragte Aki. Eine weitere Spur zog sich durch den Sand. Sie ähnelte jener Kons, doch war sie größer. (逆翻訳:「見て、こん、私の足跡はこんのとは違ってる。でもこの足跡は一体誰の？」とあきは尋ねた。さらなる足跡が砂地に続いていた。それはこんのと似ているが、もっと大きかった。)

日本語版では、この絵(図2参照)の解釈に必要な最低限の言語情報があり、「砂に足跡を付けて」いて、他の足跡を発見したことが分かる。これがないと、何かを落として探しているのか、ぬかるんでいて足が抜けにくいのか、様々な解釈の可能性が開かれたままである。言語情報により、それを一つの方向へと解釈させることができる。また、絵にはできないものとして音声がある。会話文は言語モードの得意分野である。この例では、その言語と非言語の特徴が日本語文でよく出ている。

また砂地に多くの足跡が描かれており、あきが言う下線部の「このあしあと」がどの足跡を指して

いるのかを読者が探し、二人の視線の先に足跡を見つけ、それが二人の足跡とは違うことも発見する。日本語版ではこのように絵と文字の相互作用によって読者が自然に意味を作り出すことができるように工夫されている。ところが、英語版では下線部のように、二人より前に誰かが来たことが言葉で説明されているため、読者は何を見るべきかが指定されてしまっている。ドイツ語版では、さらに詳しく絵が翻訳されていて、波線部のように、二人の足跡が違っていることと、第三の足跡の特徴までもが説明されているため、読者はただ言語情報に即して絵をなぞるだけである。しかも最後の一文で、その足跡がこんの足跡より大きい、と説明されているが、絵を見ると、こんの足跡の方が大きいように見える。ここでは翻訳者は読者に対して、大きな動物の足跡であることを先取りさせている。この例では、日本語版が発見の材料を読者に提供しているのに対し、英語版もドイツ語も言語表現が主で、絵は単に添えられただけの従になっている。そして足跡の大きさのように、絵と言葉が矛盾する場合さえあり、絵の解釈を言葉が強引に引っ張っていくこともあるようだ。

O'Sullivan (2006, 114)は、ST では絵と文字が相互に情報を補い合っていて読者に緊張感や主体的読みの楽しさを提供していたものが、TT で絵の情報を解釈して言葉で説明してしまうと、読者から緊張感や発見の喜びを奪うことになるという。この例においても、ST では絵からしか得られない重要な情報があったが、TT ではそれを言語化することにより、重要な情報は言葉が担い、絵は単なる挿絵になっている。つまり言葉が画像から情報を奪うことで、画像のもっていた情報価値が縮小し、言語の優位性がより強められた例と言えよう。2例の英独版についての分析結果は、以下のようにまとめられる。

- (1) 画像間翻訳: 保持～微調整。
- (2) モード間翻訳: 重要情報が画像から言語へ移動し、記号間の冗長性が生じた。
- (3) 非言語機能: ST では言語と対等な不可欠な情報価値をもっていたが、TT では重要な情報の担い手としての役割が低下すると共に背景描写へと情報価値が副次化した。

#### 4.2. 焦点化することによる潜在的解釈の顕在化・前景化

次の例として、渡辺茂男著『いただきまます』とその英語版 *How do I eat it?* を取り上げる<sup>4</sup>。本作品も英語版には翻訳者情報が書かれておらず、自己翻訳であると推察できる。著者はこの作品を作る前からアメリカの図書館で読み聞かせをしていた経歴をもち、子ども読者と文化差について意識して作品作りをしたものと思われる。画像間翻訳においては変更がなく保持されている。しかしタイトルからも分かる通り、食習慣に関する文化差を考慮し、この作品を英語圏でも有用なものとするための工夫が多く施され、モード間翻訳において大きな変更が見られる。

#### 例3

ST: あら あら!

TTE: No! I should have used my spoon.



図3『いただきます』(p.5)

明示化によるスプーンへの焦点化がおこった例  
(例3の絵)

例3は、「スープを のもうっと」(Soup first. Shall I drink it?)に続く場面である。ST では、この絵(図3参照)に「あら あら！」という大人目線のコメントが添えられることにより、スープをこぼしている部分に読者の視線が集中するだろう。他方、TT では下線部のように絵から読み取ってスプーンを言語化することにより、絵の中のスプーンに注意を向けさせる。こうすることで英語版のスプーンはスープを食べる正式な道具としての位置づけが与えられる。日本語版のスプーンは箸が使えない幼児用の道具としての扱いであるか、あるいはほとんど注意が向けられない背景の道具立てに過ぎない。TT では明示化することによってスプーンが注目を集め、前景化されたと言えるだろう。もちろんこれには食文化の違いが背景にあるため、明示化しなくてもスプーンを見る読者は潜在的には存在するだろう。しかし明示化することにより、そうした読み取りの方向へと誘導することになり、それ以外の解釈を排除することになる。

この例においても TT では記号間冗長性が生じたと言えるが、例1および2と大きく異なるのは、STと注目する部分が変わる点である。例1と2では同じ情報をどのモードで伝えるかがSTとTTで異なったわけだが、例3においては、STでは注目されなかった部分がTTでは明示化されることにより注目されることになった。言語化された特定部分に焦点化・前景化が起こった例である。このような例は他にも見られ、個々の画像機能のシフトと共に、TT が全体として英語圏でのしつけ絵本として機能することにつながる。この分析結果は以下のようにまとめられる。

- (1) 画像間翻訳: 保持。
- (2) モード間翻訳: 潜在的な特定部分が明示化された。
- (3) 非言語機能: 意味付けが変更されると共に、新たな焦点化・前景化が生じた。

#### 4.3 異なる解釈の提示: 新たなインタラクションを創出

最後に、手島圭三郎著『おおはくちょうのそら』とその英語版 *Swan Sky*、およびドイツ語版 *Schwanenwinter* を例にする。これは、北海道に渡ってきていた白鳥の家族が、子どもの病気のために北の国に帰る時期を遅らせていたが、やがて子どもを残して行ってしまうという話である。ドイ

ツ語版は基本的に日本語の言語表現に即した訳出になっているが、英語版は、舞台である北海道が出てこないことをはじめ、多くの点で変更が見られるものの、1988年ニューヨークタイムズ紙選世界の絵本ベストテンに選出され、高く評価されている。賞を取った作品では、翻訳時に変更されないことが多いが、英語より後から翻訳されたドイツ語版で変更が少ないのは、受賞したことも一因であるかもしれない。



図4『おおはくちょうのそら』より

英語版はこの絵を起点に言語化している(例4の絵)

例 4

ST:おとうさんは、びょうきのこどもをみながら、いいました。

「このこが げんきになるまで、きたの くにへ かえるのをおくらせよう」

おかあさんも うなずきました。

TTE:Her family stays with her long after the other swans have left. But no matter how they coax the little swan, she simply tucks her head into her soft, warm wings.

TTD:Der Vater betrachtet sein kleines Junges. Er will erst losfliegen, wenn das Kind wieder gesund ist. Die Schwanenmutter stimmt ihm zu. (逆翻訳:父は子どもを見る。子どもが元気になってから出発するつもりだ。母白鳥が同意する。)

この例の日本語版では、添えられた文の影響で、絵(図4)の中央にいるのが病気の白鳥で、その両側で両親が話していると解釈できる。右側が母であろうことも想像できる。ドイツ語版では直接話法形は使用していないものの、ほぼ同じ意味内容を再現している。一方、英語版ではかなり大きな変更が確認できる。文脈を概略で伝えると共に、下線部は絵から読み取った情報を言語化したものであり、中央にいる「柔らかく暖かな羽に頭をうずめている」病気の白鳥を、その周りの白鳥が励ましている絵となっている。父や母への言及はなく、家族5羽の区別もない。父が絶対的なリーダーであるような印象は消されている。この例から分かる英語訳の特徴としては、ST の言語要

素との直接の対応関係がない点である。翻訳者は ST から話の流れを掴んだ上で、絵に合わせた自由な創作をしたと言わざるを得ないだろう。つまり絵からの翻訳である。

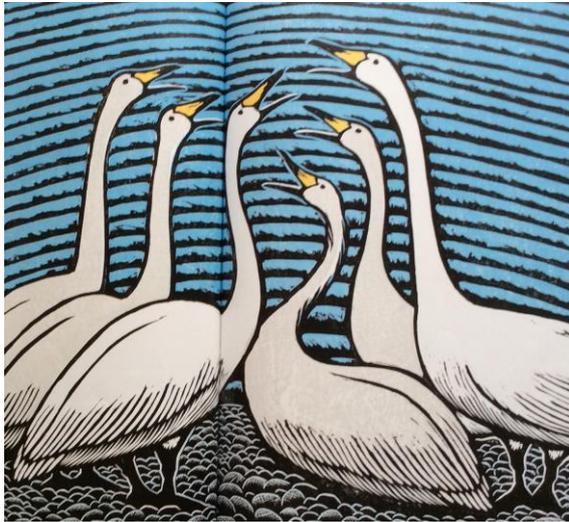


図5 『おおはくちょうのそら』より

異なる絵として機能する例

(悲しい別れの場面⇒一緒に出発しようと誘う場面)

その後、春が来て出発をそれ以上延ばせなくなり、父親が出発の決断をする場面の ST では、「次の朝、お父さんは旅立つことに決めました。病気の子どもを囲んで、親子は鳴き交わしました。悲しい声が湖に広がってゆきました」<sup>5</sup>、となっており、6羽が寄り添って鳴いている絵が描かれている(図5参照)。ここではすでに別れの悲しみが表現されている。一方英語版では、同じ絵に対して“The next morning, the other swans honk and honk. Hey want the little swan to come with them.”となっていて、6羽が鳴き交わしている絵が、悲しい別れの場面ではなく、一緒に出発しようと誘っている場面が変わった。同じ絵でも添えられる言語情報によって異なる絵の解釈が導かれる。なおドイツ語は日本語の言語面にほぼ即した訳出となっている<sup>6</sup>。



図6『おおはくちょうのそら』より

異なる絵として機能する例

(子どもが死んだ場面⇒子どもが眠っている場面)

同様に図6に添えられた ST の文は「戻ってきた家族を見て安心した子どもは、その夜息を引き

取りました。湖に映る月の影が悲しい色で揺れました」であり、病気の子どもが死んだ場面である。白鳥や湖などの自然界に下線部のような「安心」とか「悲しい」という感情を投影している。一方、同じ場面の英語版では、“That night they rest together in the moonlight. The young swan buries her head in her feathers. As she sleeps, her family gathers around her. Before morning she dies.”となっていて、下線部は絵から翻訳したものであり、病気の白鳥が家族に囲まれて寝ている場面として絵を提示している。つまりこの場面ではまだ子どもは死んでいない<sup>7</sup>。そして内面には踏み込まず、外から見える描写のみしか与えないため、「安心」も「悲しみ」も表現されない。このような例に共通する変更点は2つにまとめられるだろう。1点目は、英語版では全面的に絵から言語化したモード間翻訳が特徴的であることであり、2点目は、ST が父や母など人間の家族のイメージを投影すると共に、自然界のものに「悲しい声」や「安心」、「悲しい色」などの感情表現を使っているのに対し、英語版では人間とは異なる自然界の話として展開し、観察可能な客観的描写を心がけている点である。したがって父を中心とする家族が会話を交わす場面がカットされたり、感情表現を抑えたりしている。ちなみに、この作品の授賞時のニューヨークタイムズ紙の紹介文には、「鳥は死を悼まない。悲しみは人間の感情である<sup>8</sup>」とはっきり述べている。

これまでの分析から、英語版 TT については以下のようにまとめられるだろう。

- (1) 画像間翻訳: 保持。
- (2) モード間翻訳: 全面的に絵から言語化され、異なる観点からの語りへと変更された。
- (3) 非言語機能: ST は内面密着した感情表現を用いて人間の家族に通じる絵であるが、TT は客観的描写によって自然界を描いた絵として解釈されるよう変更された。

## 5. まとめ

本稿では、翻訳における非言語要素分析の基本モデルの枠組みを提案した上で、言語要素との相互作用により非言語機能が変化することを具体例分析で明らかに示した。翻訳者は総合的なテキストにおける非言語要素の編集そのものには決定権が与えられないことが多いものの、言語面の操作が、非言語面の機能、引いてはテキスト全体の機能に少なからず影響を及ぼす可能性があることを示唆できた。影響の度合いに応じて、同じ情報を異なるモードで伝えるケース、潜在的情報を顕在化するケース、異なる情報を作り出すケースという3つの事例を分析することによって、それぞれ非言語機能が縮小して副次化したり、異なる意味づけや前景化を獲得したり、あるいは全く新たな解釈を帯びるといった機能の変更を確認できた。

Reiss & Vermeer (1984/1991, 90)によると、テキストはそれ自体として存在するのではなく、そういうものとして解釈されて存在するという。解釈の幅が大きい非言語要素には、特にこの主張が当てはまる。翻訳行為においては、どういふものとして提供するかとの判断を戦略的に構築する必要性があるだろう。

.....

【謝辞】

- ・本研究は JSPS 科研費「視聴覚メディアにおける言語とイメージの日独英翻訳比較研究」  
課題番号 25370716(平成 25~29 年)の助成を受けたものです。
  - ・本論文は、立教大学公開講演会(2014 年)の一部、および Jaits 第 16 回年次大会(2015 年)での口  
頭発表を修正発展させたものです。貴重なコメントを頂いた方々に深く感謝申し上げます。
- .....

【著者紹介】

藤濤 文子(FUJINAMI Fumiko)神戸大学国際文化学研究所教授。機能主義的翻訳理論を研究。主  
な著書に『翻訳行為と異文化間コミュニケーション』(1997 年、松籟社)、『翻訳研究のキーワード』(編  
訳、2013 年、研究社)がある。連絡先: fumiko@kobe-u.ac.jp

.....

【註】

- 1 Gambier and Gottlieb(2001: x)は、これが視・聴覚翻訳に注目した最初だという。ただし Reiß(1971)  
は、映像や舞台作品の翻訳を巡る 60 年代の先行研究を参照しながら論を展開しており、非言語要  
素の役割についての認識は当時すでであったようだ。
- 2 画像間翻訳が生じる理由には様々あるが、例えばナチスをテーマにしたビデオゲームをドイツ語に  
翻訳する際、鉤十字やナチス式敬礼が別のものに変えられる例が Bernal-Marino (2014: 92)に紹介  
されている。これは特定社会における規制が変更理由である。
- 3 さらに ST では、車掌がやってきたのは切符を調べるためであり、少女を助けたのは偶然のように描  
かれているが、TTE ではわざわざ来てくれたように変えられている。また TTD においても「なだめた」  
とあるところから、大人の保護者的観点が言語で表現されている。しかるに絵の中では、車掌の身の  
かがめ方や前後の席の大人が見守るところが描かれているため、ST では大人の保護者的観点は絵  
から読み取ることになるだろう。
- 4 この作品のドイツ語版は見つからなかったため、英語版との比較のみとする。
- 5 ここでは本文中の引用であり、読みやすくするために表記を漢字に改めた。以下の例においても同  
様。実際にはすべてひらがな表記で印刷されている。
- 6 Am nächsten Morgen beschließt der Vater den Aufbruch. Die Schwanenfamilie umringt das kranke  
Kind, und ihre Rufe klingen ganz anders als sonst. Traurig hallen sie über den See. (逆翻訳:翌朝父は  
出発を決意する。白鳥の家族は病気の子どもを囲む。彼らの鳴声はいつもと全く異なっている。悲しく  
湖に広がる。)
- 7 ドイツ語版は基本的に日本語文に即して訳されているが、この場面では英語版と同様に子どもはま  
だ死んでいない。(In dieser Nacht schläft das Junge, geschützt von seiner Familie, ruhig ein. Die  
Sichel des Mondes spiegelt sich verschwommen im See. Den Sonnenaufgang erlebt das Junge  
nicht.[逆翻訳:その夜、子どもは家族に守られて安らかに眠りにつく。三日月が湖にぼやけて映っ  
ている。日の出を待たずしてその子は死んだ。])

- 8 実は一箇所、悲しみが述べられており、それが批判されている。“The only jarring detail in this otherwise straightforward observation of nature is the description of the swans as "saddened" by the loss of their sister. Birds do not mourn. Grief is a human emotion.” (*The New York Times*. Nov. 13, 1988)

【参考文献】

- Bernal-Marino, M. Á. (2014). *Translation and Localization in Video Games: Making Entertainment Software Global*. New York and London: Routledge.
- Cattrysse, P. (2001). Multimedia & Translation: Methodological considerations. In Y. Gambier & H. Gottlieb. (Eds.), (*Multi Media Translation. Concepts, Practices, and Research* (pp. 1-12). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Calzada Pérez, M. (2005). Proactive Translatology vis à vis Advertising Messages. *Meta* 50 (4): unpagued. [Online] <https://www.erudit.org/revue/meta/2005/v50/n4/019912ar.pdf> (2015/08/29 アクセス).
- Gambier, Y. & Gottlieb, H. (Eds.), (2001). (*Multi Media Translation. Concepts, Practices, and Research*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Hayashi, A. (1991). *Aki and the Fox*. New York: Doubleday.
- Hayashi, A. (2005). *Aki und Kon, der Fuchs*. Trans. T. Kato. Berlin: Holger Kato kunst&verlag.
- Jakobson, R. (1959/2000). On Linguistic Aspects of Translation. In L. Venuti (Ed.), *The Translation Studies Reader* (pp. 113-118). London and New York: Routledge.
- O’Sullivan, E. (2006). Translating Pictures. In G. Lathey. (Ed.), *The Translation of Children’s Literature* (pp.113-121). Clevedon: Multilingual Matters.
- Reiß, K. (1971). *Möglichkeiten und Grenzen der Übersetzungskritik. Kaegorien und Kriterien für eine sachgerechte Beurteilung von Übersetzungen*. München: Max Hueber Verlag.
- Reiß, K. & Vermeer, H.J. (1984/1991). *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie*. (2. Auflage). Tübingen: Niemeyer.
- Tejima, K. (1988). *Swan Sky*. Trans. S. Matsui. New York: Philomel Books.
- Tejima, K. (1996). *Schwanenwinter*. Trans. U. Gräfe. Frankfurt am Main: Moritz Verlag.
- The New York Times November 13, 1988. [Online] <http://www.nytimes.com/1988/11/13/books/children-s-books-after-many-a-winter.html> (2015/08/29 アクセス).
- Watanabe, S. (1980). *How do I eat it?*, Illustrated by Yasuo Ohtomo. London: The Bodley Head.
- 林明子 (1989) 『こんとあき』 福音館書店
- 保崎則雄 (2002) 「映像利用における様々な問題点と課題」 城生佰太郎 (編)『映像の言語学』 (pp.35-80) おうふう
- 清水康敬 (編) (1993) 『教育情報メディアの活用 教育システム工学』 第一法規出版

手島圭三郎(1983/2001)『おおはくちょうのそら』リブリオ出版  
渡辺茂男(1978)『いただきます』大友康夫(絵) 福音館書店